

墓碑に「満州移民」の歴史あり 墓地から平和への思いを馳せて

The tombstone speaks of its history of “Manchurian immigrants”
Hoping for Peace at the Graveyard

王 榮 (木下貴雄)¹⁾

Wang Rong (Takao KINOSHITA)

要旨

1945年の敗戦から76年経ついま、悲惨な戦争の歴史は確実に風化しつつあり、人々の記憶から消えようとしている。同時に、中国残留孤児を生んだ「満州移民」の歴史もまた忘れられようとしている。そんな状況のなか、中国残留孤児をはじめとする中国帰国者が高齢期を迎え、差し迫って最大の課題は介護であり、死後の安住地である墓も大きな問題となっている。

本稿では、中国帰国者やサハリン残留邦人等の“終の棲家”である中国帰国者公墓等の碑文から、戦争に翻弄され続けてきた「満州移民」の歴史、残留孤児や残留婦人たちはどのように生まれたのか、なぜ「満州国」に渡ったのか、そして、敗戦直後の混乱の中、異国の地でどのような苦難に遭い、どんな思いを抱いて、どんなふう生き延びてきたのか、そして、なぜ、いま公墓が必要なのかなど、時空を超えて、戦争の悲惨さと平和の尊さに思いを馳せながら、「満州移民」という史実から明日の平和への教訓を学びたい。

キーワード

満蒙開拓団、中国残留孤児、中国帰国者、戦争、平和

1. はじめに

現在の中国東北部にかつては日本が建設した傀儡国家「満州国」(1932-1945)があった。その「満州国」に日本は国策として、敗戦の1945年までに約30万人の「満蒙開拓団」の開拓民とその家族を送り込んだ。いわば満州移民である。政府の巧みなスローガンに踊らされて、夢を求めて満州に移住した「満蒙開拓団」の開拓民たちは、1945年8月15日の敗戦を境に、生と死の間を徘徊し、多くの尊い命が満州の冷土に失われた。中国人に助けられてかろうじて生き延びたいわゆる『中国残留孤児』²⁾たちが、ようやく祖国日本に帰国することができるようになったのは、敗戦から40年余の歳月が経ってからであった。

日本敗戦76年を迎える2021年現在、戦争によって余儀なく中国(旧満州国)に取り残され、長い歳月を経て日本に帰国した『中国残留孤児』と『中国残留婦人』の平均年齢は約80歳となり、超高齢化が進んでいる。

1981年、厚生省(現・厚生労働省)の定義では、『中国残留孤児』とは、敗戦時に13歳未満で自分の意思に関係なく中国に残留した人。『中国残留婦人』とは、敗戦時に13歳以上で自分の意思で中国に残留した婦人のことである。また、中国帰国者とは、厚生省(現・厚生労働省)が援護施策の対象者として、中国から日本に永住帰国した『中国残留孤児』と『中国残留婦人』及びその家族に対する総称である。

中国帰国者の高齢化が進展する中、日本社会が直面している高齢化の課題と同様に、中国帰国者たちもさまざまな高齢による難題に直面している。半世紀もの長い歳月にわたって、中国で中国人として生きてきた『中国残留孤児』は、中国から帰国(来日)後、孤児自身は一生活者として、家族を養うために、言葉や生活習慣などのさまざまな「壁」を乗

り越えながら働いてきた。そして、定年を迎え、高齢期を迎えた今、生き甲斐作りや生涯学習、健康管理、介護、終末期ケア、看取り、葬儀など、中国帰国者であるがゆえに、より困難な問題に直面している。これらの問題については、これまでは日本社会において論じられることも少なかった。しかし、日本が「多文化共生社会」になりつつある今、中国帰国者をはじめとする異文化背景を持つ外国人の高齢化問題³⁾について、その現状と課題を早急に把握し解決することが求められている。

敗戦から76年経ったいま、悲惨な戦争の歴史は確実に風化しつつあり、人々の記憶から消えようとしている。同時に、中国残留孤児を生んだ満州移民の歴史もまた忘れられようとしている。そんな状況のなかで、中国帰国者が高齢化を迎え、差し迫っている最大の課題は介護であり、死後の安住地である墓も大きな問題となっている。

2021年1月末現在、全国中国&樺太残留邦人公墓(共同墓地)は17カ所ある(表1)。

本稿では、中国帰国者やサハリン残留邦人⁴⁾等の“終の棲家”である中国帰国者公墓等の碑文から、戦争に翻弄され続けてきた「満州移民」の歴史を概観したい。そして、そこから残留孤児や残留婦人たちはどのように生まれたのか、なぜ「満州国」に渡ったのか、そして、敗戦直後の混乱の中、異国の地でどのような苦難に遭い、どんな思いを抱き、どんなふう生き延びてきたのかを明らかにする。そのうえで、なぜ、いま公墓が必要なのかなど、時空を超えて、戦争の悲惨さと平和の尊さに思い馳せをながら、「満州移民」という史実から明日の平和への教訓を学びたい。

2. 碑文が語る苦難の歴史と平和への思い

中国帰国者公墓(共同墓地)は、中国残留孤児や残留婦人たちの死後の“居場所”だけ

表1 全国中国&樺太残留邦人公墓（共同墓地）一覧（2021年1月末現在）

地域	墓地（公墓）名	所在霊園	建立または管理先	建立年月
札幌	樺太残留邦人共同墓地	札幌市南区藤野聖山園	NPO 法人日本サハリン協会	2016.5
宮城	中国帰国者之墓	仙台市営いずみ墓園	中国帰国者記念墓碑建立協力会	2011.12
山形	平和の碑・中国残留帰国者墓苑	山形市柏倉字中林地内	日本中国友好協会山形県連合会	2014.10
群馬	群馬県中国帰国者共同墓地	前橋市嶺公園墓地	群馬県中国残留帰国者協会	1991.9
山梨	中国帰国者共同墓地	甲府市千代田霊園	山梨県日中平和友好会	1990.9
東京	中国帰国者之墓	西多摩霊園	中国帰国者之墓管理委員会	1990.6
信州	長野中国帰国者共同墓地	長野市営浅川霊園	長野市中国帰国者の会	未確認
	松本中国帰国者共同墓地	松本市営中山霊園	松本中国帰国者家族会	2002.5
	飯田中国帰国者共同墓地	飯田市飯田霊園	中国帰国者連絡会	1998.11
	上田中国帰国者協同霊苑	上田市下室賀霊園	上田日中友好協会	2007.7
	大町引揚鎮魂平和観音像	大町市平築場	大町市仏教会	1988.
愛知	中国帰国者公墓「平和之碑」	名古屋市営八事霊園	中国帰国者公墓管理委員会	1997.11
近畿	中国帰国者共同墓「帰郷之碑」	伊丹市杜若寺内	大阪中国帰国者センター	2017.11
	兵庫県中国帰国者共同墓地	神戸市立舞子墓園	兵庫県中国帰国者の会	2019.3
高知	高知中国帰国者之墓	高知市筆山霊園	高知県中国帰国者の会	1996.10
山口	中国残留婦人慰霊の碑	山口市瑠璃光寺内	中国残留婦人交流の会	1992.10
福岡	中国帰国者之墓	福岡市営西部霊園	福岡県中国帰国者の会	1994.9

※出典：中国帰国者定着センター情報誌「同声・同気」、中国帰国者支援・交流センター情報誌「天天好日」、朝日新聞、日本経済新聞、信濃毎日新聞、読売新聞、中日新聞、毎日新聞、河北新報、神戸新聞に掲載された記事、関係団体のHPに掲載されている情報、「大陸の花嫁」（井筒紀久枝著、岩波現代文庫刊）および筆者は直接調査票を送付した調査を基に筆者が整理したもの。

ではなく、墓碑はこの人たちが「満州移民」という国策に翻弄され、苦難のなかで生きた“歴史の証”でもある。戦争がもたらす悲惨さとは、満州移民の苦難の歴史とは、碑文の中にその真実が語られている。

以下において、いくつかの碑文から、その苦難の歴史と平和への思いにふれておきたい。

なお、本稿のなかにある役職は建立当時のものであり、碑文は、筆者が中国帰国者公墓（共同墓地）の調査時に取り寄せたもの及び関係機関の会報、HP等から整理したものである。

1) 東京 「中国帰国者之墓」

「中国帰国者之墓」は、東京西部の西多摩霊園の中にある。同公墓は1990年6月に、日本に永住帰国した『中国残留孤児』と『中国

残留婦人』で、定着まであるいは定着半ばで亡くなった人たちのために、「中国残留孤児の国籍を取得支援する会」（河合弘之会長・千野誠治事務局長）によって建立された。墓碑銘に以下のような内容が記してある。

「1931年9月満州事変以降、五族協和、王道楽土建設の名のもと、多くの日本人が中国東北部に渡った。特に重要国策として日本全国から開拓団、青少年義勇軍が中ソ国境等に送り込まれた。

しかるに第二次大戦末期、ソ連軍の侵攻に際し日本軍の庇護無く、多くの婦女子が飢え、病、酷寒に苦しんだ。また、逃避行の果て家族は離散し、異郷に永く放置されたが中国の人々に救われた。

戦後40年余り、多くの孤児・婦人たちが念願叶い故国に帰ったが、定着自立の過程で不

幸にして他界された御霊を此処に祀る。再び過ちが繰り返されぬことを願い、永遠に安らかに眠れんことを祈る。」

また、建立之由来に次のように記している。

「望郷の思い久しくようやく帰国した残留孤児、残留婦人は懸命に定着、自立の努力を続けていますが、その過程で新たな問題が生じました。それは、せっかく祖国にかえりながら不幸にして他界した婦人、孤児あるいはその家族の人達の、御霊が眠る墓所がないことです。

そこでこの墓所を中国残留孤児の国籍取得を支援する会が発案し、孤児支援関係者、厚生省など関係官庁の方々、西多摩霊園、宮川石材株式会社等、その他心ある方々のご協力によって建立されたものです。衷心よりお礼申し上げます。」

「中国帰国者之墓」の脇には地藏尊が設置してあり、墓所背面の壁にある物故者名板には120名以上の名が刻まれている。

2) 山梨 「中国帰国者共同墓地」

甲府市千代田霊園にある中国帰国者共同墓地は、1990年9月に日中平和友好会山梨県支部によって建立された。碑文の「墓地建立の由来」には次の内容が記してある。

「昭和四十七年、日中国交正常化以来、今次大戦において中国に残留を余儀なくされた日本人とその親族が望郷の念久しく、ようやく故国に帰ってきました。そして、懸命な努力により、定着、自立への道を歩んでおりますが、その過程で新しい問題が発生しました。それは孤児、残留婦人、あるいはともに相携えてきた家族の死であり、その御霊の安住の地の確保であります。

そこで私達は帰国者たちが名実ともに、日本の社会に溶け込み自立できるまで、他界された方々の御霊を安置する為、山梨県を初め

関係機関、団体等、心ある方々の多大なご協力により甲府盆地を眼下に臨むこの地に無宗教による共同墓地を建立いたしました。再び戦争の惨禍を繰り返さぬ事を願い「永遠に平和を」…とこの碑文を捧げます。」

3) 群馬 「群馬県中国帰国者共同墓地」

群馬県前橋市嶺公園墓地（市営霊園）に建てられた「群馬県中国帰国者共同墓地」は、群馬県の帰国者や支援者、支援関係団体で構成する「群馬県中国帰国者共同墓地建立委員会」（田中實委員長）が、行政機関をはじめ、支援関係団体の支援により、1991年9月に建立された。墓碑の「墓地建立の由来」には次の内容が記してある。

「第二次世界大戦は日本の敗戦に因り、1945年8月終結した。当時中国大陸に在住の日本人は一瞬にして祖国を失い、極度の混乱の渦中に難民と化し筆舌に絶する苦難を負い、心ならずも幼児との離別も余儀なく、温情ある現地中国人に託したと聞く。しかして吾らは中国残留日本人孤児として養育され、家庭を持つまでになったのである。

戦後30余年、日中の国交漸く正常化し私達の帰国の道も開かれ、逐次家族と共に帰国が叶えられたが、言語、習慣の異なる日本の社会に溶け込むことは容易でなく、凡ゆる困難も克服し一日も早く自立すべく相互扶助により努力する以外に道はなかった。

歲月人を待たず、老い果てるもの、病に斃れ御霊を安置の処とて無く遺骨を抱え路頭に迷う。同憂同志相計り無宗教の共同墓地建立を計画するや、県市町村の行政機関をはじめ、県拓友協会の親身あるご指導ご援助を仰ぎ、前橋市に於いては用地の特別ご配慮をいただく等各方面より物心両面にわたり多大なるご厚情を賜り、吾らの悲願であった大事業の完成は無上の喜びとし、ご協力に対し深甚の謝

意を表す。

朝に松風を聞き夕空に煌めく星を仰ぎ、名峰赤城の山懐に抱かれて、遙かに在す中国の養父母、知己に想いをいたし、吾ら永久に安らぐ処を得たるを告げん。

世界の平和と人類の限りない幸せを希い、茲に共同墓地建立の顛末を伝う。」

4) 山口 「中国残留婦人・慰霊の碑」

山口県山口市内の瑠璃光寺のなかにある「中国残留婦人・慰霊の碑」は、1992年10月、中国残留婦人交流の会（山田忠子会長）によって建立された。中国残留婦人のために建立された唯一の公墓である。墓碑の「碑によせて」には次の内容が記してある。

「聖戦を信じ、王道楽土建設のため満州に渡った開拓移民は、昭和20年の敗戦を境に言語に絶する運命人となった。父を憶い母の名を呼び、一步一步の逃避行にたおれた婦女子たちは、中国人の援護によって助けられた。

昭和47年、ようやく日中の国交が回復したものの中国残留婦人の対策は、戦後47年目の今も回復されていない。「祖国へ帰りたいけれども帰れなかった!」、これは国に見捨てられ、中国の地で生きてきた中国残留婦人たちの思いである。

私たちは、この冷厳な事実をつたえ望郷の思いの中に、天の星となられた残留婦人たちの御霊を祖国に迎え永遠に、慰め平和への祈りをこめてこの碑を建てた。」

中国のハルビン市にある「ハルビン外僑養老院」⁵⁾で晩年を過ごし、亡くなった中国残留婦人の林由子さん、玉田芳子さん、亀井光子さん、太安美代子さん、板東初子さんらがここで合祀されている。

5) 福岡 「中国帰国者之墓」

博多湾を見下ろす福岡市立西部霊園に建てられた「中国帰国者之墓」は、残留孤児の支援活動を行うボランティアをはじめ、中国帰国者及び関係有志者で構成する「中国帰国者墓碑建立委員会」によって、1994年9月に建立された。墓碑の「建立の志」には次の内容が記してある。

「命の尊厳は死を悼むことに始まります。まして、その死が肉親や家族にあっては尚更のことです。一九四五年の大戦において、中国で父母、兄妹を亡くし、以来残留を余儀なくされた孤児や婦人が望郷の情炎久しく、ようやく帰国。しかし、その定着の過程で不幸にして他界されています。定着とは、そこが定住の地でなくてはなりません。死者を祀ることはまた生きている者の証でもあります。忘れられていく戦争の惨禍を再び繰り返さない平和の誓いと更なる日中友好の架け橋を願い御霊の安らぎを祈り、ここに中国帰国者の墓碑を建立致しました。」

6) 愛知 中国帰国者公墓「平和之碑」

愛知県名古屋市立八事霊園のなかに建立され中国帰国者公墓「平和之碑」は、長年にわたって、『中国残留孤児』の肉親探しや帰国後の自立支援をし続けてきた、「日中友好手をつなぐ会⁶⁾」愛知県支部（伊藤力支部長、木下貴雄事務局長）を中心とする「中国帰国者公墓建立委員会」（伊藤力委員長・木下貴雄事務局長）は、お墓がなくて困っていると、帰国者の声に応え、愛知県と名古屋市の協力と有志者の支援により、1995年11月に建立された。墓碑の「碑によせて」には次の内容が記してある。

「1945年9月2日の日本降伏に日中戦争・太平洋戦争の終結から50周年を迎えた。日本の国策によって“王道楽土”建設のために旧

満州国に渡った開拓民は、1945年8月15日の敗戦を境に言語に絶する運命人となった。天・地・人のすべてに見放され、無数の人たちが尊い命を失い、生き延びた人たちはまた生と死の境を徘徊し、地獄のような逃避行を余儀なくされた。

そんな極限の惨状のなかから、寛大な心を持つ中国人の人間愛に助けられ、九死に一生を得た人たちは、所謂「中国残留孤児・残留婦人」となった。そして、半世紀もの長いときの中で、戦争の加害者と被害者として、また、日本の歴史の証人として、故郷への思いを胸にそれぞれの人生を異国の地・中国で送り、今はようやく望郷の思いが叶えられ、祖国日本の大地に帰還したものである。

「落葉帰根」の如く、“祖国の大地で永眠を”との天の星となった、御魂やすかれと関係者一同赤心のもと、『日中友好・永久不戦』を誓い、世界平和への悲願をこめて、此処に「平和の碑」を建立しました。

この愚かな戦争で尊い命を失った“すべて”の英霊よ、永遠に、安らかに眠り給え。」

「平和之碑」の納骨堂の中には、観音像が設置してあり、碑の前には、「平和之碑」を見守るように、幼い孤児を胸に抱く中国人養母の「大地の母」像が設置してある。“平和之碑”の字は、中国江蘇省元副省長が揮毫した。2021年3月現在、20霊が安置してあり、毎年の春、中国の清明節（墓参り）に合わせて合同法要を行っている。

7) 山形「平和の碑・中国残留帰国者墓苑」

山形市柏倉字中林地内にある「平和の碑・中国残留帰国者墓苑」は、日本中国友好協会山形県連合会「平和の碑・中国残留帰国者墓苑」建設委員会によって建立されたもので、墓苑は2014年6月、碑は同年11月に建立された。碑は3m²の台座の上に、高さ91cm、長

さ182cmの黒御影石に、「平和への思い」という碑文が刻まれている。碑文は次の通りである。

「日本による中国侵略戦争で、国策として中国の旧満州に送り込まれた満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍は、一九四五年八月の敗戦で満州の荒野に見捨てられました。関東軍は開拓団を置き去りにして敗走開拓団は引揚の逃避行の中、ソ連軍や現地住民の攻撃にさらされ、飢えと寒さ、疾病や集団自決などで多くの犠牲者を出しました。山形県は全国第二位送出県であり、一万八千人が入植し、そのうち七千四百人が死亡したとされます。この中で幸運にも中国人養父母に助けられ生き延びたのが、いわゆる中国残留孤児といわれる人たちです。一九七二年、日本と中国は国交を回復したものの、孤児たちが帰国できたのは十年、二十年後であり、五十歳を越した孤児たちの多くは日本語の習得や適切な就業もままならず貧困と差別の境遇におかれました。戦後七十年を前に、中国残留孤児の悲劇の歴史を刻み、次世代に伝えるとともに、夢にまで見た祖国に帰りたい、そして、永遠の日中友好と再び戦禍の起こることのないようにという孤児らの願いで、ここに平和の碑、帰国者墓苑を建設しました。この墓苑はこうした思いに共感した県内外の約千人の方々の浄財と地元住民の温かい理解によって建設されたものです。深く敬意と感謝の意を表します。」

8) 神戸 中国帰国者公墓（共同墓地）

神戸市立舞子墓園にある「中国帰国者公墓（共同墓地）」と「残留孤児・中国帰国者の記念碑」は、2019年3月、「兵庫県中国帰国者の会」（植田恒陽代表）によって建立された最新の中国帰国者公墓であり、平成時代に建てられた最後の公墓でもある。

2015年に発足した「兵庫県中国帰国者の会」は、厳しい経済状況を強いられ、自ら墓地を建立することもかなわない帰国者が多く、残留孤児やその配偶者が亡くなった後、遺族はどうしようもなく、遺骨を自宅においたままにしていたケースも少なくなかったため、共同墓地を建立する運動に取り組みはじめた。会のメンバーは街頭に立ち、多数の署名を集めて行政に支援を求め、一般市民からも寄付を募った。2017年、神戸市長は残留孤児の苦難の人生、そして墓地の確保が切実な問題であることに深い理解を示し、舞子墓園に用地を提供し、共同墓地と記念碑が建立されるようになった。

「残留孤児・中国帰国者の記念碑」には、次の碑文が刻まれている。

「私達残留孤児は、日中戦争の悲惨な被害者です。1945年、日本敗戦の混乱の渦中、中国の地で幼くして両親と死に別れ、または生き別れになりました。日本政府は、取り残された私達を搜索せず、日本に引き揚げさせるための支援も行わず、中国に遺棄しました。幸いにも善良な中国人養父母が私達の命を救い、育ててくれたのです。私達は一生、養父母の恩を忘れません。

1972年、日中両国の国交が正常化しました。ところが日本政府は、引き続き私達を搜索することなく、逆に祖国日本への永住帰国を制限・妨害する政策をとりました。その結果、私達の永住帰国は一層遅れ、帰国後の生活も極めて困難になりました。私達と一緒に日本に帰国した家族も、大変な苦勞を強いられました。

私達兵庫県に住む残留孤児は2004年、国の責任を明確にし、新たな支援政策を創設するため、国家賠償訴訟⁷⁾に立ち上がりました。私達が求めたのは、『日本の地で、日本人として、人間らしく生きる権利』です。私達は

全国各地の残留孤児と団結し、多くの市民・日本国民から多大な支援をいただき、兵庫の地で闘いました。そして2006年12月1日、神戸地方裁判所で歴史的な勝訴判決を勝ち取りました。神戸地方裁判所は、日本政府が残留孤児を遺棄したことを『無慈悲な政策』と断じ、早期帰国や帰国後の自立支援の義務を怠ったことを違法と認定したのです。

私達は、ここに記念碑と共同墓地を建立し、残留孤児の悲惨な歴史を永く後世に伝え、世界に二度と戦争の惨禍を起こさせないための礎とします。また日本の地で、多様な人々が差別されることなく、人間として尊厳をもって生きていける社会を創り上げる決意の証とします。記念碑と共同墓地の建立には、県内外の数百人の皆さんの御寄付、神戸市の用地提供、兵庫県の補助金を賜りました。心より御礼申し上げます。」

この碑文には、各地に存在する中国帰国者公墓に見られない特徴があると、神戸大学の浅野慎一氏が指摘している。その特徴とは、①残留孤児の悲劇を生みだした日本政府の責任を明確に指摘している。②残留孤児を育ててくれた中国の養父母・民衆の存在にもきちんと言及している。③兵庫県の残留孤児が多数の市民とともに主体的に国家倍止揚訴訟を闘い、神戸地裁で国の責任を認めさせた歴史的事実も明記している。④二度と戦争を起こさないのはもちろんだが、それだけでなく、多様な人々が差別されることなく、尊厳をもって生きていける日本社会・世界社会を創り上げるといふ決意も高らかに述べている。浅野氏いわく、このようなシャンと筋の通った、豊かで温かく、未来を見据えた、そして普遍的価値のある残留孤児の碑文は、全国的にも稀有である。

9) 札幌 「樺太残留日本人共同墓地」

満州移民の中国残留邦人とは別に、戦後樺太（現ロシア・サハリン）に残留を強いられた邦人らを祖国で供養しようと、NPO法人日本サハリン協会（斎藤弘美会長）が中心となって、1990年代以降に永住帰国した樺太残留日本人のための共同墓地として、2016年5月、札幌市南区の霊園「藤野聖山園」に建立された。

墓地の広さは5m²、墓石は、台座部分を合わせて高さは約2mのタワー型。日本とサハリンをイメージした2つの石の間の先端には、日本とサハリンを「隔てる海、つなぐ空」をイメージさせる青いガラスを埋め込んである。また、それぞれの石には、日本とサハリンを自由に行き来するカモメ（ロシア語はチャイカ）が彫られていて、死後の魂は、カモメのように日本とサハリンを自由に行き来してほしいとの願いが込められている。墓石はわずか43kmという距離に隔てられて、長い間は親兄弟姉妹にも会えずに苦しい生活を続けた方々の今までの困難を想い、安らかな未来を祈る形になっている。台座には、日本語とロシア語でサハリン残留邦人の概略と、共同墓地建設の由来が刻まれている。

この共同墓地は当初、経済的理由で墓を持たないサハリンからの永住帰国者のために計画されていたが、その後、帰国がかなわずにサハリンで亡くなった残留邦人の家族らが、「樺太関係者の魂の集まる場所にしたい」などの要望もあって、残留邦人も含めた共同墓地として建立した。サハリンからの永住帰国者のために初めて建立した共同墓地である。

樺太からの残留日本人の永住帰国事業は1992年に始まり、これまでに134世帯303人が帰国されている。うち9割が北海道に暮らしており、高齢化に伴って要介護者が増えている。

10) 中国方正 「日本人公墓」

日本国内とは別に、中国東北部（旧満州）に中国政府によって建てられ、管理されている中国国内唯一の「日本人公墓」があることは、日本国内であまり知られていないであろう。

中国東北部・黒竜江省ハルビン市から、東におよそ180kmのところの方正県という地方都市がある。方正県は、松花江という大河沿いにあり、筆者の出身地である通河県の対岸に位置している。

方正県の中心から東に行ったところに砲台山と呼ばれた一角に、「中日友好園林」という「園林」がある。園林の中には、かつてこの地域で亡くなった満蒙開拓民約5千人の墓、「方正地区日本人公墓」と「麻山地区日本人公墓」が並んで建てられており、中国国内唯一の「日本人公墓」である。

1963年に建立したこの「方正地区日本人公墓」は、日中が国交を回復する9年ほど前、つまり、まだ日本への憎しみが強く残っていた時代に建てられたのである。侵略した日本人たちが眠るお墓を侵略された中国が建てるということもまた不可思議である。

現在の方正県は、かつて旧満洲国の三江省（現在の黒竜江省）に属する農村地域であった。方正県には、大羅蜜開拓団、伊漢通開拓団、永建（李花屯）開拓団、宝興郷長野開拓団という四つの開拓団があり、2千人余りの開拓民が幾つもの村に分かれて入植していた。

1945年8月、日本の敗戦により、黒竜江省の佳木斯など他の地域に入植していた開拓民たちがつぎつぎとソ連軍の侵攻と略奪を避け、方正県を經由してハルビンに向かおうとした。方正県には関東軍の食糧補給基地があり、ハルビン市への通過点でもあったため、開拓民は方正県を目指したという。避難民となった開拓団民たちが、伊漢通の開拓団本部

（現在の伊漢通郷吉興村）、興農合作社（現在の方正第二中学）一帯に達した時、飢えや寒さ、疲労、伝染病などによってつぎつぎと倒れていった。取り残された乳幼児、婦女はそのまま余儀なく方正県に留まり、婦女の多くが中国人と結婚し、身寄りのない乳幼児は中国人の子どもとして引き取られ、いわゆる「残留婦女・残留孤児」となった。

方正県には日本人難民収容所も作られていたが、収容所の中でも最も悪条件の収容所として知られていた。1945年の秋から翌年の春にかけて、収容所に収容された人々は、発疹チブスと餓死でおよそ5千人近くが死亡した。零下40度にもなる酷寒の冬の方正では、死体は凍りついていたが、春になると、死体は溶け始めて悪臭を放つため、方正県政府は住民を動員して、開拓民の遺体にガソリンをかけ、三日三晩かけて焼却し、砲台山近くに埋めたという。

1963年の春、中国人の嫁になった残留婦人のMさんは、自分たちの食糧を得るために砲台山の麓近くで開墾できる土地を探していた時に、白骨の山を見つけ、すぐにそれが収容所で亡くなった日本人たちの白骨であることを悟った。Mさんは、その時のことについて次のように語っていた。「私は、ああ国のために祖国をあとにした開拓民の妻や子供がこんな無残な姿とはあまりにひどすぎる。日本政府は、このような犠牲者の遺骨を知っているのだろうか。私は残念で胸が押さえつけられるようでした。この遺骨をなんとかしてあげられないだろうか、と草を刈りながら胸がいっぱいになってきました」。その後、Mさんは方正県政府に出向き、なんとか自分たちの手で遺骨を埋葬したい旨を言い、許可してくれるように願い出た。当時の県政府は判断を黒竜江省人民政府に仰いだ。省政府も北京の中央政府にお伺いをし、当時の周恩来総

理に報告された。周恩来総理は、「開拓民といえども日本軍国主義の犠牲者である」と、日本人公墓の建立を許可したと言われている。

1963年5月、中央政府の許可を得た方正県政府は、伊漢通郷吉興村に公墓を建立し、開拓民の遺骨を埋葬したと同時に石碑を建て、「方正地区日本人公墓」と刻んだ。1973年、伊漢通でダムを造る計画が進められ、水害を避けるために「方正地区日本人公墓」を砲台山の北側の麓に移設した。公墓は円形で、セメントで作られており、直径3m、高さ1.5m、内部は穹窿形になっていて、地面はセメントで固めている。「方正地区日本人公墓」と刻んだ高さ3mの石碑は、花崗岩で作られている。1994年、日本人公墓地区の面積が拡大され、1995年には「中日友好園林」と改称された。中日友好園林には日本人公墓の他に中国養父母公墓、歴史陳列館、藤原長作記念碑なども作られ、専属の管理人が置かれ、開拓団の悲劇の地から平和友好と歴史教育の地として生まれ変わっていった。

中日友好園林にある「日本人公墓」には、日本からは満蒙開拓団関係者だけではなく、2008年には日本駐中国宮本大使、2012年には丹羽大使が参拝された。丹羽大使が在任中、日本駐中国大使として初めて、地方に住む残留孤児の養父母に、大使名義の感謝状を贈ることもされた。また、2009年、日本政府は園林管理費の支援援助の申し出をしたが、日中間の緊張関係が悪化するなかで、方正県人民政府は、財政支援を辞退していた経緯もあった。

この中日友好園林は、満蒙開拓歴史の悲劇の記憶としての役割だけではなく、ある意味で方正県と日本との間で築かれた太い絆を象徴するものでもあった。だが、日中間の緊張関係が悪化することによる影響はこの園林にも及んだ。2011年、愛国主義者によって園林

に赤ペンキがまかれ、その後、県政府によって建てられた「日本開拓団民亡者名録」も撤去され、園林も閉鎖された。いまではもう存在しない「日本開拓団民亡者名録」には次の碑文が書いてあった。

「1945年日本が敗戦し、終戦の混乱の中で方正県に足止めされていた満蒙開拓団員約15000人帰国しようとしていたが、5000人余りが寒さや飢えなどで亡くなり、当地で簡易に埋葬された。20年ほど経って、荒野に埋葬されたことを忍びなく思った方正県民は遺骨を収集した。1963年、周恩来首相の許可を得て、方正地区日本人公墓を建設し遺骨を納めた。1984年、麻山正地区日本人公墓も当地に移設された。公墓には氏名の不明な者が多数いたが、関係者らの尽力によって一部は判明していた。そこで、氏名を刻み残すことにした。

その目的は、一、後世の日本人に、先人がこの地に永眠していることを忘れさせないため。一、人類の善なる愛と人間の本性を示すため。一、前事を忘れず後事の師とし、戦争がもたらさず害悪を反省し、平和の尊さを明示するため—ここに碑を建立し、後世への警鐘とする。」

1984年、中国政府は「方正地区日本人公墓」の東側に「麻山地区日本人公墓」を同じ形状で建立した。

麻山は、現在の黒竜江省鶏西市麻山区、ロシアに近い所である。1945年8月、ソ連軍の攻撃を受けた哈達河開拓団は絶望的な状況にあった。このままでは婦女子たちがソ連軍の凌辱に遭ってしまうため、身近に迫った危機に420名ほどの婦女子は団長とともに自決の道を選び、麻山で散った女性たちの遺骨は野ざらしになっていた。戦後、遺族たちはなんとか遺骨を収集し慰霊したいと思って、哈達河会を結成し、1983年は初めて麻山を訪れた

ものの、写真撮影も慰霊行事も許可されなかったため、散乱する遺骨を前に涙を吞んで帰国したという。その後、有力関係者らの努力によって遺骨収集が実現し、中国政府は「方正地区日本人公墓」の東側に新たに公墓を建てたのである。また、1986年、他の地域で亡くなった開拓団民の遺骨もここに移設され、単独で公墓を建てず、「麻山地区日本人公墓」に合祀されている。

この中日友好園林にある「日本人公墓」は、「満州移民」、「満蒙開拓民」、そして、「残留孤児・残留婦人」の歴史であり、戦争によってもたらされた悲惨さの証であり、平和の大切さと尊さを学ぶ大事な場所でもある。

11) 中国濃河 名も無き墓標「望郷之霊」

旧満州の凍土には、名も無き無数の満蒙開拓民の亡霊が今も眠っている。現在の黒竜江省通河県濃河鎮の松花江の畔にも、かつては名も無き「望郷之霊」の墓標があった。

方正県の対岸にある筆者の出身地である通河県（旧満州国三江省通河県）には、1942年、木下家が属する「新立屯上久堅村開拓団」（団員総数800余人）が、分村移民開拓団として通河から濃河鎮の約30kmの間に、10の部落に分かれて入植していた。1945年8月の逃避行のなか、半数以上の人たちの尊い命が凍土に散っていた。長野県が送り出した開拓団のなかで、死亡者数が多い開拓団の一つであった。木下家では、生後1ヶ月の筆者の父は、中国人の養父母に引き取られて命拾いをしたものの、祖母と四番目の伯父は、濃河鎮の収容所で亡くなって、いまでも異郷の松花江の畔に眠っている。

木下家の満蒙開拓概略史は次の通りである。

祖父（当時43歳）、元軍人（軍籍：陸軍軍曹、兵科：歩兵）で、軍隊現役時代に金鷄勲章を受章。軍隊を退役後、地元飯田で警官とし

て勤務。戦局が厳しくなるなか、もう一度軍人として戦線に行くか、開拓団の警備指導で満州に行くかの選択を迫られ、戦争はもう二度としたくない思いから、1942年3月、新立屯開拓団（上久堅村開拓団）警備指導員として、家族で渡満した。1945年8月、終戦直前の現地召集で佳木斯駐屯部隊本部に向かう途中に、ソ連軍の捕虜となりシベリアに送られ抑留された。自決した中尉の軍服をただ一日だけ着せられたために、指揮官の地位にあったゆえ、戦犯容疑者として一般捕虜から隔離された。1946年5月、死因不明の亡骸となって、同じ収容所にいる長男に下げ渡された。1948年、長男とともに遺骨でソ連から帰国を果たした。

祖母（当時39歳）、1942年3月、新立屯開拓団（上久堅村開拓団）警備指導員の夫および子供4人とともに家族で渡満。7月10日に五男を出産して1ヶ月足らずのため、体調が優れない中で敗戦を迎えた。苦難な逃避行に耐えられず、一度は四男と五男を連れて松花江に投身自殺を図ろうとしたが、三男に見つかり引き止められて生き延びるが、1945年の冬、通河縣濃河鎮の日本人収容所で病死した。

一番上の伯父（当時18歳）、陸軍歩兵（佳木斯）。1942年3月家族で渡満。現地での召集により陸軍に入隊。敗戦直後に特務機関から他の5名とともに、新立屯の開拓民の救出を命じられ、開拓団に到着する直前にソ連軍の捕虜となり、シベリアの収容所に送られた。1948年、父の遺骨と共にソ連から帰国を果たした。

二番目の伯父（当時15歳）、1942年3月家族で渡満。1945年春、満州より内地の大竹海兵団に入団。呉港で人間魚雷兵として出陣前に原爆に遭い敗戦を迎えた。原爆の被爆者だった。

三番目の伯父（当時12歳）、1942年3月家

族で渡満。小学校6年生。苦難な逃避行のなか、通河縣濃河鎮の収容所で母と弟の死を看取り、自分も瀕死する直前に中国の老人に助けられ育てられた。1955年3月、中国より舞鶴港にて引き揚げてきた。

四番目の伯父（当時5歳）1942年3月家族で渡満。苦難な逃避行のなか、通河縣濃河鎮の収容所で一度は中国人に預けられたが、馴染めないためまた収容所に戻された。1945年の冬、濃河鎮の収容所で病死した。

筆者の父（当時0歳）、1945年7月10日旧満州生。苦難な逃避行のなか、祖母が病死前に、かつて病いの世話をした中国人に預けられ育てられた。中国の師範学校を卒業後、中国人女性と結婚し、子供4人を授かり、筆者の母が35歳の時に病死した翌年の1982年に中国より引き揚げてきた。

長野縣飯田市神の峯に建つ新立屯上久堅村開拓団の満州開拓碑には、次の碑文が刻んである。

「上久堅村は昭和13年7月、村内と郷土から300戸を目標に三江省通河縣新立屯へ分村移民の送出を決定した。団員は第二の祖国建設中に、大戦勃発青壮年男子は大方召集され現地には老幼婦女子のみ残された。昭和20年、団は原住民の暴徒に襲われ、更に敗戦により数百の尊い命は病と飢に苦しみつゝ異郷に散った拓友の霊に捧ぐ。

北満の大地に眠る皆さん、敗戦によって開拓の夢は破れ、幾多の苦難の中に斃れた皆さんに、私共は謹んで哀悼の意を表し、遺された開拓精神を永遠に記念すべく此処に碑を建てました。

今や日中友好漸く緒につき希望の光が輝いてきました。私共は皆さんの遺志を継承して、此の大業の実現に向かって邁進する覚悟であります。どうぞ皆さん、安らかにお眠りください。」

「新立屯上久堅村開拓団」の避難民の収容所となった濃河鎮の倉庫も、環境や条件が悪く、この収容所で、筆者の祖母と四番目の伯父がその冬に亡くなっていた。祖母が亡くなった時に、三番目の伯父は、地元の中国人の青年に自分が履いている綿入りのズボンを謝礼に、凍土に墓穴を二つ（一つは祖母用、もう一つは自分と弟用）を掘ってもらい、その一つに祖母を埋葬した。伯父がその時に見た収容所周辺の光景を、手記「母ねむる大地」のなかで次のように綴っている。「…少し行って水路を渡るとき、橋の下を見て驚いた。水の枯れた水路には、橋から捨てられた死体が山をなしていた。言うまでもなく、倉庫でつぎつぎと死んでいった人たちの死体だった。上に積み重なった死体は、野良犬に見るも無残に食い散らされていた…」

また、四番目の伯父が亡くなった時に、三番目の伯父もかなり体が弱っていて、遺体運びをお願いできる人もなく、自分で運んでいる途中で力が尽きて、遺体を橋の下の水路に落としてしまい、祖母のそばに埋めることができずにいたという。その時の心境を次のように綴っている。「…自分たちのために掘った墓穴までは、二百メートルほどの距離が果たして行きつけるかどうか、怪しいものだった。痩せさらばえてしまった弟だったが、もうほとんど力がなくなった私は、弟を抱えて何度も倒れかかった。左右に抱え直しながら、わが身を引きずるようにして進んだ。もう雪の冷たさを感じることもなく、死を恐れることもなかった。やっと水路に架かった橋までたどり着いた。もうその向こうに母が待っている、“もう少しだ、がんばれ、がんばろう”，弟にも自分自身にも心の中でかけ声をかけながら、橋を渡ろうとしたときに、力の尽き果てた私の腕から、まるで自然のように弟の亡き骸がすっぽりと抜けてしまい、水路に折り

重なって、雪をかぶっている死体の後を追って、弟はその上にうつ伏せに落ちていた。私は雪の積もった橋の上にやっと自分を支えて、それを見下ろしたが、もうどうする術もなかった。“弟よ、堪忍してくれ、兄ちゃんももうだめなんだ、母ちゃんの墓はすぐそこなのに、連れて行ってあげられなかった…”。そう叫びかけているうちに、私は、自分の死体が雪を被っているのを脛の裏にみたような気がし、次第に意識を失っていた…」

手記は続く。「…濃河鎮まで来た私は、馬を思い出の倉庫の向こうの水路のほうへ進めた。母と弟が眠っているここへ来たのは、実に八年四ヶ月ぶりだった。水路の橋を渡って、母を埋めたところへ行ってみると、八年の風雪はもう位置も定かでないほど荒れさせていた。わずかにそこに立つ一本の枯木と二つの窪みで、やっと母の眠っている位置を定めることができた。私は土を掘って、一晩かけて丸太を削って作った“望郷之霊”の墓標を建てた。そして、水路のほうへ行き、あの時の山のような死体はいったいどうなったのか、今は跡形もない。水路の岸から一握りの土を取り、“弟よ、母さんのそばへ寝かせてやるぞ”と声をかけた。あの時、母のそばへ連れて行こうとしてもついにいけなかった弟も、今は誰かれの区別もなく整理されて、どこかに葬られているとしても、せめて弟のいた場所の土だけなりと、母のそばへ添えてやりたかった。“弟よ、母さんのそばだよ”，あたかも生きている人にも言うように話しかけながら、持ってきた土を母の墓へそっと置くと、丁寧にそれを均すのだった。そして、私は、“望郷之霊”の墓標に対して、“母さん、日本と文通ができるようになりました。父さんは亡くなりましたが、兄さんたちはみんな元気で日本にいます…”。墓標に向かって報告する私の頬を新しい涙がとめどなく流れて、黒

い土に沁みてゆくのだった。」

あれから76年の歳月が経った。松花江の畔に立つ名も無き「望郷之霊」の墓標も、かつての濃河鎮の収容所となった倉庫もいまは跡形もなく全てが消えている。また、一番上と二番目の伯父はとうに他界し、父も昨年の夏に他界した。残り三番目の伯父は高齢のため介護施設に入所している。その伯父は、過去の戦争と平和について、上久堅村開拓団の慰霊文のなかで、こんなことばを綴っていた「…静かに眼を開けば、あの多くの犠牲の上に今日の繁栄がある。あの戦争ゆえに、人生なかばにして悲しくも逝ってしまった人たちの孫がいまここに、戦争を知らない世代が沢山いる、幸いなことだ。老いも若きも私たちみんなで、この幸せな平和を守り通すことを誓おう、そこには美しい太陽が輝く。みんなで平和の鐘を鳴らそう、それを私たちの心で世界に響かせよう、この神の峯からも…」

12) 「母子地蔵」「乙女の碑」、そして、「望郷の鐘」

公墓（または共同墓地）とは別に、満州移民である中国残留邦人の歴史に関する「母子地蔵」と「乙女の碑」、望郷の鐘がある。

浅草 「まんしゅう地蔵」

東京・浅草寺の境内に漫画家・ちばてつやさんがデザインし、中国残留孤児の支援者である千野誠治さんや漫画家の森田拳次さんらが呼びかけて、まんしゅう地蔵建立委員会・まんしゅう地蔵建立応援団によって1997年4月に建立した母子地蔵がある。

母子地蔵の建立の由来には、次のように刻んである。

「第二次世界大戦末期、ソ連参戦で混乱状態となった中国東北部（旧満州）で、逃避行の末命を落とした日本人の数は、20万人を超

えると云われています。

酷寒の曠野を逃げ惑ううちに、母子が生き別れとなったり、飢えや疫病に苦しみながら亡くなるなど、その悲劇は数知れません。

犠牲になられた母子の霊を慰め、また、いまだ再会のかなわない親子の心のよりどころとして、二度と戦争という過ちを繰り返さないことを祈念しつつ、ここに母子地蔵を建立いたしました。」

黒川 「乙女の碑」

岐阜県加茂郡白川町黒川の「佐久良太神社」には、長い間、由来のないまま佇んでいた1.3メートルの石製観音像「乙女の碑」がある。旧満州（中国東北部）でソ連軍将校らの「性接待」をさせられた黒川開拓団の女性約15人のうち、現地で亡くなった4人の慰霊のため、1982年、黒川分村遺族会が建てられたものである。

現実社会に「表」と「裏」があるように、過去の歴史にも「表」と「裏」があったために、この「性接待」という事実が「表」となると、慰霊碑が建てられるようになるまでは長い年月が必要だった。

そのきっかけとなったのは、1981年、当時の開拓団関係者らが引き揚げから35年ぶりに、多くの死者が眠る入植地・吉林省陶頼昭（とうらいしょう）を訪ね、この時初めて、ソ連軍将校らの性の相手をさせられた女性の一人が、「性接待」について参加者らに語り、異郷の地で無念の死を遂げた4人を偲んだ。この語りによって、当時の関係者は、「誰を犠牲にしていま自分が生きているのか」を改めて思い知ったという。

「亡くなった娘たちの慰霊碑を造ろう」と、当時の遺族会を中心に会員が浄財を出し合って慰霊碑を造った。だが、過去を忘れたい遺族や存命の被害女性の反発もあって、神社に

建立された碑は、除幕式を前に誰かに倒され、ひびが入った。碑は「性接待」のことには触れず、「乙女の碑」の内容は伏せられていた。記念誌には、下書き段階で「性接待」の内容を記していたが、最終的にその真実は除去され、「女性たちも頑張ってくれた」程度に留められていたという。碑文のない「未完の碑」となった「乙女の碑」は、優しい面ざしが何を伝えようとしているのか、由来を知らない者には分からない碑として、神社の境内に佇んでいた。戦後70年以上その真実が秘密にされていたのであった。

2012年、黒川開拓団遺族会の会長となった人は、初めて「性接待」の事実を知り、タブーとなっていた事実を碑文に残すために尽力し、2013年ごろから、当時ソ連兵からの性暴力を受けていた女性たちが、「性接待」に関して証言するようになって、碑の事実が明るみとなった。遺族会が、被害女性らの理解を得て、2018年11月、新たな事実を明記した4000字にも及ぶ長い碑文が完成し、除幕式が行われた。

この「乙女の碑」は、「引き揚げ時の性暴力被害を伝えるおそらく唯一の碑」と評されている。

古今東西、いつの時代においても、政治によって引き起こされる戦争の犠牲者になるのは、政治家ではなく、一般民衆であり、特に婦女子や子ども、高齢者がもっともの犠牲になっている。

「望郷の鐘」

長野県飯田市下伊那郡阿智村にある長岳寺は、武田信玄の遺骸を安置したとして知られる寺である。実は、この寺にはもう一つの物語、「中国残留孤児の父」として知られる先代住職・山本慈昭僧侶のことである。山本慈昭僧侶にまつわる話のなかに、なくてはなら

ないのは「望郷の鐘」である。

長岳寺の階段を上って山門をくぐると、すぐ左手に赤い鐘楼があり、この鐘は「望郷の鐘」である。鐘楼の左側にある桜は望郷の鐘の桜と称されている。鐘楼の由来書きには、「望郷の鐘は、中国旧満州で死没した四万数千人の供養のため鑄したもので、中国紅十字会児斐君女史の書と当山貫主の望郷の詩が刻まれている」とあり、鐘は旧満州の方向に向いている。鐘には次の望郷の詩が刻まれており、山本慈昭僧侶の強い思いがこの詩に込められている。

望郷の鐘

思い出は かくも悲しきものか
祈りをこめて 精いっぱいつけ
大陸に命をかけた同胞に
この鐘を送る 疾く瞑せよ
日中友好手をつなぎ
共に誓って 悔を踏まじ
大陸に命をかけた同胞に
夢美しく 望郷の鐘

山本慈昭僧侶は生前、日々合掌して旧満州の方向に鐘を突き、旧満州で亡くなってすべての亡霊に、心と思いを込めて祈りを捧げられていたという。

境内には満蒙開拓団に関するいくつもの慰霊碑のなかに、「日本と中国は 平和と友好で 永劫に手を握りましょう 1966年初夏」と刻まれている「日中友好不再戦の碑」がある。碑の裏には次のように書かれている。

「旧西部8ヶ村から終戦前に、王道楽土建設の名のもとに、誤った軍国主義政治のため、かりたてられて、中国に渡ったこの地方の開拓民は、およそ900名に及び、内600名の犠牲者を出した。この不幸な体験から『戦争はまっぴらだ、2度とあんな目にあいたくない中国と仲よくしよう』と私達は心から誓って、関係者1万余名の浄財カンパにより、この碑

を建立した」

この碑が建てられたのは1966年、つまり、日中国交正常化前である。日中国交断絶のなかで、恐らく戦後はじめて日本国内で建てられた日中友好の碑であると言えよう。この碑が建立された経緯はあまり知られてないため、ここにその経緯の概要を記しておく。

山本慈昭僧侶は、敗戦間近の1945年5月に、小学校の教師として渡満し、その後、シベリアに抑留されて、奇跡的に帰国ができたものの、家族が旧満州で亡くなったこと、また、多くの教え子たちが満州の地で亡くなったり、取り残されたことを知った。生きているならその子を、亡くなったならその遺骨を日本に連れて帰りたいとの思いから、生涯を残留孤児たちの肉親捜しに捧げたのであった。旧満州に取り残されている子供たちの情報収集に奔走するなかで、平岡ダム建設のために中国から連れて来られ亡くなっていた中国人たちがいることを知り、中国人の遺骨収集にも尽力した。1963年、日中友好協会伊那支部を結成し、1964年秋、日中友好協会訪中団の一員として訪中し、収集した平岡ダム中国人労務者の遺骨62柱を、北京の人民大会堂で周恩来総理に直接手渡し、謝罪した。同時に、旧満州の地に散らばっている開拓民の遺骨収集の許しをお願いしたところ、周恩来総理からは「みなさんのそういうお気持ちはわからないでもありませんが、お互いに広野に何万と言う遺骨を求めて収集し、送還し合うということは大変な仕事です。それよりも、これからはこのような犠牲者を出さぬように、日中友好の碑を建て、両国は永遠に平和を誓おうではありませんか。」との提案があったという。山本慈昭僧侶は、周恩来総理のその言葉に心を動かされて、碑を建てる約束を果たすべく、1966年初夏に「日中友好不再戦の碑」を建立したのである。

また、1972年10月、阿智村出身の開拓団員の妻Kさん（当時52歳・渡満当時24歳）から、同村に住む70歳の母親宛に帰国したい旨の手紙が届いていた。山本慈昭さんは、周恩来総理宛てに手紙を書き、帰国を嘆願した。1973年3月、Kさんは東京羽田空港に降り立った。周恩来総理のご理解と山本慈昭僧侶の尽力による戦後第1号の再会であった。そして、これをきっかけに、山本慈昭僧侶は長岳寺に「日中友好手をつなぐ会」の看板を揚げられたのであった。

筆者が「日中友好手をつなぐ会」の会章と、「日中友好不再戦の碑」に刻まれていることばが合致していることに気が付いたのは、平成時代になってからであった。

3. 愛を心に刻み、恩は石に刻む

中国残留孤児を育ててくれた養父母への感謝を込めて、残留孤児や支援関係者によって国内外に養父母への感謝の意を表す碑も建立されている。

1) 中国方正「中国養父母公墓」

前で紹介した「中日友好園林」のなかに、残留孤児として育った遠藤勇さん（中国名：劉長河）によって建てられた「中国養父母公墓」がある。

日中国交正常化後に日本への帰国が実現し、貿易会社を興して成功した遠藤さんは、養父が亡くなった後、中国にいる日本人孤児たちを育てた養父母たちの安住の地を作ろうと、養父母公墓を思い立った。しかし、当時の中国では、墓地を持てる人も少なかったため、中国側との交渉は難航したようだった。最終的に、養父母たちへの報恩の気持ちが中国側を納得させて、1995年8月、「中国養父母公墓」を中日友好園林のなかに建立した。墓の内部は鉄筋とコンクリートで作られ、五

層に分けて遺骨を安置することができるようになってきている。墓の正門には、「養育の恩、永世不忘」（養育の恩は永遠に忘れない）の文字が書かれている。2018年末現在、23名の養父母の遺骨が安置されている。

中国側が建てた中国養父母公墓物故者の名簿碑には、以下の碑文が刻まれている。

「1945年秋から冬にかけ、日本人開拓民は敗戦という困難に直面し、方正から撤退していった。この地で多くの幼児が放棄され、孤児となった。その弱い体では、露や寒さをしのぐべくもなかった。方正の人々は、敵国の民といえども見捨てることができず、黄帝・炎帝の時代から伝えられる礼をもって、孤児らに衣食を与え、長い年月を経て、苦労を重ね、貧しい中ではあったが、孤児たちは成長し、残される養父母を思い、心を痛めながらも故郷を目指して去っていった。“鳥も育ててもらった恩に報いる。羊の子も乳を授けてもらった者には跪く”との考えにもとづき、孤児であった遠藤勇氏は、すでに物故した中国人養父母の公墓を築いた。養育の恩をたたえ、ここに、養父母の功績と、恨みを乗り越えた徳を示すために、物故した養父母の名を刻むことにした。その名を残し、後の世代の人々を育てるためである。」

この「中国養父母公墓」については、2007年4月に来日した当時の温家宝首相は国会演説のなかでも触れていた。その部分の内容は次の通りである。「……戦後、2808人の日本人の子供たちが中国に置き去りにされ、残留孤児となりました。戦争の苦痛を嘗め尽くした中国人が彼らを引き取って、彼らを死の危機から救い出し、育てあげました。中日国交正常化の後、中国政府は孤児たちの肉親探しに大きな支援を与えました。現在までにすでに2513人の日本人孤児が日本に戻りました。彼らの多くは帰国後に、中国養父母謝恩会な

どのような民間団体を自発的に設立し、中国で養父母達の共同墓地と中国養父母感謝の碑を寄付、建立しました。その中に次のような碑文が書かれています。中国養父母の人道的精神と慈愛心に深く感謝し、ご恩を永遠に忘れません……」

2) 中国瀋陽 「中国養父母に感謝の碑」

中国瀋陽市にある「九・一八歴史博物館⁸⁾」展示室の最終コーナーに、親子のブロンズ像が設置してある。

高橋健男氏は著書のなかでこの親子のブロンズ像について、次のよう書いている。

「五～六歳の男の子が左肩から大きなリュックサック、右肩からは水筒を提げて、左腰のところで大事そうに手で支えて、見上げる顔は右に並ぶ母親に向いている。母親は穏やかな表情でやさしく男の子に微笑みかけている。男の子の後ろには、菅笠と人民服姿の父親が手を子の背中に添えて、先に行くように促しているかのように見える。男の子を真ん中に親子三人はゆっくりと歩む姿はいずこかへの旅立のように見える。」

この親子像は、「中国養父母に感謝の碑」である。碑文は以下のように記されている。

「日本軍国主義による中国侵略は、中国人民に多大な損害と計り知れない苦痛を与えました。一九四五年日本の敗戦当時、数多くの日本人児童が中国遺棄され、家族離散の悲惨な運命に遭遇しましたが、寛大な心を有する善良な中国人民は、当時の極めて厳しい生活環境の中において、日本人孤児達に自愛に満ちた手をさしのべ、庇護救出し、心血をそそぎ、暖かい愛情を持って育てていただきました。一九七二年九月、日中両国の国交正常化が実現し、孤児達の肉親調査が始まると、身元判明者も逐次増えてきましたが、中国養父母は帰国希望者に対し深い理解を示し、離別

の悲しみに耐え忍びながら涙をふるって日本に帰して下さいました。

今これら多くの帰国孤児達は、中国養父母の温情に衷心から感謝しつつ日中両国の架け橋の役割を果たすことを誓いながら人道的精神と自愛の心に深く感銘し、この恩を永久に忘れることができません。

日中平和友好条約締結二〇周年の意義あるこの年に当たり、両国の永遠の平和と友好を祈念するとともに、中国養父母の恩徳に深く感謝し、この偉大な精神と崇高な事業を子々孫々に長く顕彰し、人類の悲劇を繰り返すことのないよう後世の戒めとしたく、ここにこの碑を建立するものであります。』

「中国養父母に感謝の碑」は、1999年8月、中国残留孤児の支援活動をしているボランティア関係者らが企画提案し、中国政府関連部門の許可を得て、中国残留孤児を育ててくれた中国養父母に感謝の意を表すために建立された。漫画家・ちばてつやさんが碑のデザインを手がけられ、彫像は、瀋陽魯迅美術学院の学生によって制作された。

3) 鹿児島 「中国養父母に感謝の碑」

2014年1月、日本人遺華孤児鹿児島会は、鹿児島県・市日中友好協会の協力を得て、終戦の混乱で、中国東北部（旧満州国）に残された日本人孤児を育てた、中国人養父母たちへの感謝の石碑を、鹿児島市天保山公園の共月亭に建立した。中国養父母に感謝する碑は、中国の瀋陽市や方正県に建てられたものがあるが、日本ではこうした感謝の碑の建立は珍しく、国内初の建立となっている。中国養父母に感謝の碑の正面には、次のような碑文が刻まれている。

「第二次大戦の末期、中国の東北部（旧満州国）においては、日本人成人男子が関東軍により国境警備に動員され、住民の大半は老

人と婦女子のみであった。このような状況下で終戦後は交通も途絶し、内陸部へ入植していた開拓民や残留邦人の祖国への帰還は困難を極めた。

混乱の中で家族が離ればなれになり、身寄りを見失った日本人の幼児は、多く中国人に引き取られ、その家族の養育を受けることになった。戦後遅く五十六年より始まった訪日肉親探しにより、日本人の中国残留孤児二千五百名近くが帰国した。帰国者の多くは言語や日本社会への適応など生活面で多大な苦勞を味わったが、ともかくも、生き永らえて余生を祖国日本で過ごせる身の上を鑑みる時、終戦当時に異国の孤児へ救いの手を差し伸べられた中国人養父母の慈愛の精神に対し、改めて深甚の感謝を表すと共に、日中平和条約締結三十五周年に当たり日中友好の末永い存続を念願する次第である。』

中国養父母に感謝する碑は、中国湖南省の石が使われ、高さ2m50cm。建立場所にある共月亭は、鹿児島市の友好都市である中国長沙市が寄贈されたもので、友好を深める両市民が同じ月を眺める意の「共月亭」。その共月亭と指呼の間に、養父母感謝の碑が建っていることがまた意味深い。

4. 過去・現在・未来

あの悲惨な戦争の終結からすでに76年の歳月が流れ、時代は「昭和」から「平成」、そして、新しい時代「令和」に変わった今、戦争の実態と悲惨さを知る人は高齢となり、多くは他界されたため、戦争の真実を伝えられる経験者は少なくなった。戦争は遙か過去の出来事であり、戦争がもたらした悲惨かつ冷酷な実態を知らない人がほとんどになっている。そして、歴史の事実としてのあの悲惨な戦争は確実に風化し、人々の記憶から薄れ去ろうとしている。

国策として旧満州（現在の中国東北部）に移民し、日本の敗戦によって生き地獄の逃避行のなか、親と死別し、中国人に助けられ養育されて中国で成長した満州開拓団の子供たち—中国残留孤児たちもまた忘れられた存在であった。

敗戦直後に、祖国・日本に意図的に忘れられた中国残留孤児たちは、日本人の集団引揚を知ることもなく、祖国への帰国機会を失い、中国に留まらざるを得なかった。そして、そのまま中国で成長し大人となって、中国人と結婚し、子供が授かり、新しい家族が生まれ、望郷の念を胸に中国で生き続けた。

1972年の日中国交正常化を契機に、民間団体「日中友好手をつなぐ会」（山本慈昭会長）の働きかけによって、1981年以降、肉親探しで訪日できるようになった中国残留孤児たちは、マスコミにクローズアップされ、多くの日本人はブラウン管越しに、約半世紀ぶりの「肉親再会」のドラマに感動し、涙を流した。

しかし、感動の涙が乾くとともに、肉親捜しの後の残留孤児たちはどのように生きているのかを知る人は少なく、存在そのものが時間とともに忘れられていった。

中国残留孤児の存在がふたたび思い出されたのは、1995年にNHKが放送したドラマ「大地の子⁹⁾」だった。日本人がその人間ドラマに感動し、涙を流した。

その後の中国残留孤児たちが、日本でどう暮らしていたのかは、関心を寄せる人々は決して多くなく、中国残留孤児たちのことは、ふたたび時の流れとともに忘れられた。

中国残留孤児の存在がふたたび思い出されたのは、時代が21世紀に入ってからで、2千人を超える中国残留孤児たちが、祖国を相手に集団賠償請求訴訟を起こしたことであった。多くの日本人は、中国残留孤児たちの実態に驚き、そして、国の新たな支援策によっ

て、生活が保障されるようになってよかったと、慰めの涙を流した。

しかし、新たな支援策は、名称こそ変わったものの、実質は生活保護の延長線上にあり、残留孤児たちが求める「人間の尊厳」が配慮されていないこと、要介護になっても「言葉の壁」や「文化の壁」等によって、介護サービスが受けられずに苦しんでいるそのことを知る人は果たしてどれだけいるのだろうか。国が提唱している「多文化共生」の影に埋もれて、中国残留孤児たちのことはまた、社会から、人々から忘れられた。

だが、日本社会に忘れられていたことをよそに、中国残留孤児たちは、家族を伴って日本に帰国し続けてきた。そして、今、1世から4世まで、多くの帰国者たちが全国に暮らしている。

高齢となった中国残留孤児たちはまた、あの悲惨な戦争の生き証人として、負の遺産を背負いながら、祖国に帰ってきた幸せを十分にかみしめることなく、鬼籍に入った人が増えてきているため、各地に中国残留孤児たちが眠る「墓碑」が建てられた。肉親を満州の土に失い、苦難の逃避行を生き抜き、中国人養父母に育てられ、生き延びて、そして、半世紀ぶりの故郷への帰国。碑文の中から、国策に翻弄され続けてきた中国残留孤児たちが歩んできた苦難の人生、戦争が人間にもたらした過酷さと悲惨さ、そして、永遠に平和を願う思いに耳を傾け、心眼で見つめて欲しい。

また、碑文を通して、祖国に帰りたい思いを胸に、生き地獄のような逃避行の果てに満州の凍土となってしまった無数の魂の声なき声を心に刻んで欲しい。そして、時が過ぎ去るなか、戦争がもたらしたこの史実を正視し、過去と向き合い、その悲惨な事実は後世に語り継がれるべきだ。世界の平和と子供たちの明るい未来のために。

5. おわりに

本稿を綴りはじめたのは終戦67周年の年だった。あれから歳月が流れ、中国帰国者公墓（または共同墓地）一覧表の数字は少しずつ増えてきた。同時に、歳月とともに中国残留孤児たちの高齢化が進み、孤児が“孤老”になり、人生の終着駅を前にして、ここでまた言葉や文化、習慣などが障碍となって、介護や終末期ケア、看取り、葬儀、墓などの問題は以前にも増している。特に母語がえりによるコミュニケーションの障碍が深刻化しているのである。要介護になっても、介護通訳がいなければ適切な介護サービスを受けられていないのが現状である。

いま、ここで、もう一度、幾たびにも社会と人々に忘れられてきた、「満州移民」の生き証人である中国残留孤児たちの存在を、想い出して欲しい。そして、波乱万丈の人生を送り続けてきた、高齢となった今もなお、平凡な老後生活を送られずにいる“孤老”たちのために、もう一度、私たちに何かできることはないかを考えて、支えて欲しい。“孤老”たちにはもう時間がない、中国残留孤児たちの存在を想い出すのは、恐らくこれが最後になるかもしれない。だからこそ、国策によって、戦争によって人生を翻弄され続けてきた“孤老”たちに、せめて晩年くらいは心身ともに平和で穏やかに過して欲しい。

祖国日本と旧満州国のはざままで、国策によって人生を翻弄され続けた「満州移民」、そして、「残留孤児・残留婦人」の苦難の多い生き方は、歴史のなかで忘れ去られることはあってはならない。歴史のなかに、永遠不動の「記憶」として、史実として、語り継がれていくことを切に願い、また、中国引揚者の2世として、明日への平和を耕すための「平和の種まき」を続ける、新たな「開拓者」であり続けたい。

注釈

- 1) 中国引揚者2世、1982年来日、大学非常勤講師（金城学院大学・愛知県立大学・日本福祉大学）、多文化ソーシャルワーカー、多文化介護士、認知症介助士、終活ライフケアプランナー、健康介護コンシェルジュ、心療回想士、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト代表、中国帰国者公墓「平和の碑」管理委員会副委員長
- 2) 木下貴雄 2003 中国残留孤児問題の今を考える—中国「残留孤児」という名の「日系中国人」鳥影社 p15-p16
- 3) 王榮（木下貴雄）・渋谷努 2018【研究ノート】中国帰国者の介護から在住外国人高齢者への介護支援の現状と課題—異文化介護の現場から—中京大学社会科学研究所第38巻第2号 p61-p76
- 4) サハリン残留邦人とは、終戦時、日本領樺太で暮らしていて戦後日本本土へ引き揚げることができず、樺太（サハリン）に留まらざるを得なかった人や、ソ連本土に移送され帰ることができなかった人を『樺太等残留邦人』と呼んでいる。
- 5) 哈爾賓外僑養老院は、中国哈爾濱市にある外国人高齢者のための老人福祉施設。最盛期は数カ国の外国人高齢者がここで暮らしており、最期をこの施設で迎えられた中国残留日本人婦人も少なくなかった。
- 6) 日中友好手をつなぐ会は、1972年（昭和47年）、日中国交正常化を機に、旧満州からの引揚者や関係者らが「中国残留孤児の父」と呼ばれる山本慈昭僧侶のもとに集い、中国残留日本人孤児の肉親捜しのための会として、日中友好手をつなぐ会が結成された。日中友好手をつなぐ会の活動がきっかけとなって、残留孤児の肉親捜しが次第に本格化となった。
- 7) 2002年、全国15の地方裁判所で、永住帰国した残留孤児の約9割（2211名）が原告として日本政府を相手取って国家賠償訴訟を起こした。2006年以降、8つの地方裁判所で相次いで判決が出たものの、原告（残留孤児）が勝訴したのは1地裁（神戸地裁）のみで、残りは敗訴であった。2007年原告団・弁護団が集まった全国会議で、全会一致で与党プロジェクトチームの新しい支援策を受け入れることを決定し、政府との和解が成立した。新支援策は、これまでの「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国

後の自立の支援に関する法律」の一部改正（法律第127号）として、2007（平成19）年12月5日に公布された。その支援策の内容は、①国民年金（老齢基礎年金）の満額支給、②生活支援給付、③地域における生活支援の三つの柱からなっている。

- 8) 満州事変の契機となった柳条湖事件現場の近くに建てられた中国国家一級博物館。中国からみた「九一八事変」（満州事変）以降の日本による侵略と抗日戦争の歴史がジオラマ等を多用した展示により描かれている。
- 9) 大地の子は、山崎豊子の小説、中国残留孤児陸一心（ルーイーシン）の波乱万丈の半生を描いた物語である。NHK放送70周年記念番組として、日中の共同制作によりドラマ化され、1995年11月～12月にかけて放送され、話題となって、高い視聴率だった。

参考文献

1. 浅野慎一 兵庫県における中国残留日本人・帰国者の運動「兵庫県中国帰国者の会」（その2）兵庫県 AALA 連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（兵庫県版）』2020年3月号
2. 川恵実 2019 告白 岐阜・黒川満蒙開拓団73年の記録 かもがわ出版
3. 王榮（木下貴雄）・渋谷努 2018 【研究ノート】中国帰国者の介護から在住外国人高齢者への介護支援の現状と課題—異文化介護の現場から—中京大学社会科学研究第38巻第2号
4. 方正友好交流の会会報「星火方正」26号・27

号・28号・29（2018/5・12、2019/5・12）

5. 平和の碑・中国残留帰国者墓苑建設委員会 2015 平和への思い「平和の碑・中国残留帰国者墓苑」建設の記録 日本中国友好協会山形県連合会
6. 丹羽宇一郎 2014 中国の大問題 PHP新書
7. 和田登 2013 望郷の鐘 中国残留孤児の父・山本慈昭 しなのき書房
8. 飯田市歴史研究所 2009 満州移民 飯田下伊那からのメッセージ 現代史料出版
9. 高橋健男 2008 満州開拓民悲史—碑が、土塊が、語りかける— 批評社
10. 木下貴雄 2003 中国残留孤児問題の今を考える—中国「残留孤児」という名の「日系中国人」鳥影社
11. 山本慈昭・原安治 1981 再会—中国残留孤児の歳月 NHK出版
12. 周国賢（木下敬介） 1958 母ねむる大地 第二書房

参考サイトなど

1. <http://www.china-embassy.or.jp/jpn/> 中華人民共和国駐日本国大使館（閲覧：2021/4/27）
2. <http://hrbfz.gov.cn/col/col24111/index.html> 方正县人民政府（閲覧：2021/4/27）
3. <https://baike.baidu.com/> Baidu 百度（閲覧：2021/4/27）
4. <https://www.chinaviki.com/china-travel/> 旅情中国（閲覧：2021/4/27）
5. 中日新聞朝刊 2019/8/10 p29社会12広域